

山本勉弥著

秋に於ける俳諧師の系統



Y911
x74



山本勉彌著

萩に於ける俳諧師の系統

山本勉弥寄贈



34015

萩市立図書館

款に於ける俳諧師の系統

文章博士大江春人、明法博士大江廣元を先祖に有する毛利家は元就を始めとし、歴代の藩主は武を尊ぶ一方、文事と奨励した。従つて領内士民には漢詩和歌の素養あるものが多く、俳諧も同様で、各年代を通じ其盛行状況が察せられる。是等に就て別誌に誌す機会があると思ふ。茲には簡単に俳諧師の系脈を記すことにする。

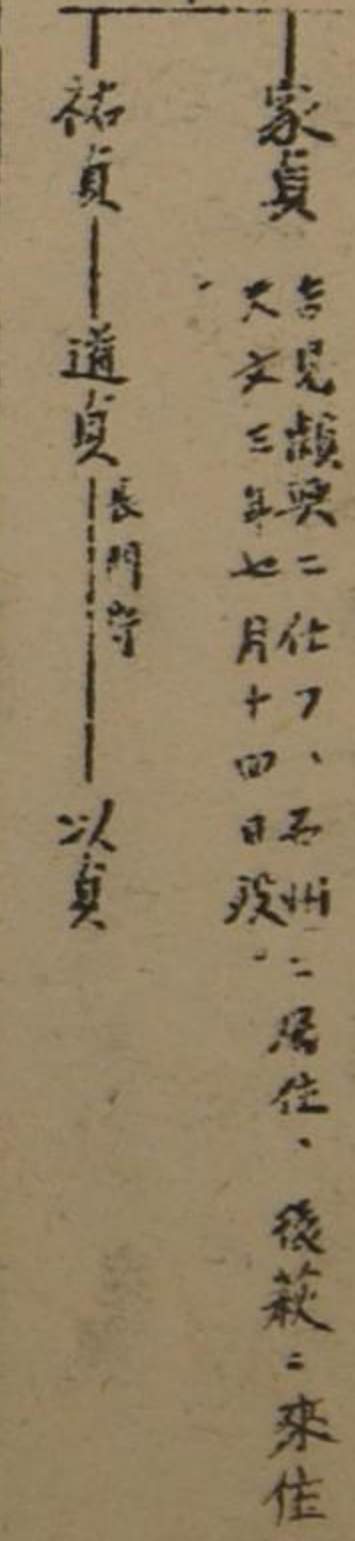
去る三月萩市立図書館で開いた萩史蹟保存會第一回講演會の席上、余は萩俳諧師の系統が三つありとし、其解説を試みたが、其後更に一つの系統を加へなければならぬ事に氣付いた。夫は遠歌師として、毛利氏の縁を食んで居る安部家のことである。

安部家は平知盛の後裔であり、十二代家貞は吉見頼興に仕へ、石州に居つたが、後萩に移り、部將として萩附近を鎮有し、自ら開基大檀那となり、開山西阿大和尚を援けて古萩に常念寺伽藍を建立し、自分の法名「常念」を以て寺號とした。以下元貞より眞貞に到

まで別名畧歴の判明して居るものは左記系圖に附記した。唯著貞の
 事は少し、特記する要がある。著貞は直貞の次男であるが父祖の道風を享
 けて幼時より歌學を好み、延寶七年江戸に遊學した。翌八年毛利
 綱廣より拔擢、士籍に列せられた。和歌俳諧の師範家として毛利家
 と關係の生じたのは是れ始りである。

安部家系圖

平和盛ヨリ十一代、安部家



家貞

吉見頼興二任、石州に居住、後藤・來住
天文三年七月十四日歿

祐貞

長門守

以貞

後貞

吉見頼興三任、石州に居住、後藤・來住
元永四年七月四日歿、享年六十

元貞

吉見頼興四任、石州に居住、後藤・來住
元永四年七月四日歿、享年六十

經貞

吉見頼興五任、石州に居住、後藤・來住
元永四年七月四日歿、享年六十

某

道貞 元貞の三子、吉見高幼年ナルヲ以テ陣代トナル
 吉見高行ニ任テ、慶長六年七月七日歿
 吉貞 慶長六年七月七日歿、慶長六年七月七日歿
 吉貞 慶長六年七月七日歿、慶長六年七月七日歿
 吉貞 慶長六年七月七日歿、慶長六年七月七日歿

某

直貞 吉見高行の三子、吉見高幼年ナルヲ以テ陣代トナル
 吉見高行ニ任テ、慶長六年七月七日歿
 吉貞 慶長六年七月七日歿、慶長六年七月七日歿
 吉貞 慶長六年七月七日歿、慶長六年七月七日歿

吉貞 吉見高行の三子、吉見高幼年ナルヲ以テ陣代トナル
 吉見高行ニ任テ、慶長六年七月七日歿
 吉貞 慶長六年七月七日歿、慶長六年七月七日歿
 吉貞 慶長六年七月七日歿、慶長六年七月七日歿

和貞 吉見高行の三子、吉見高幼年ナルヲ以テ陣代トナル
 吉見高行ニ任テ、慶長六年七月七日歿
 吉貞 慶長六年七月七日歿、慶長六年七月七日歿
 吉貞 慶長六年七月七日歿、慶長六年七月七日歿

惟貞 吉見高行の三子、吉見高幼年ナルヲ以テ陣代トナル
 吉見高行ニ任テ、慶長六年七月七日歿
 吉貞 慶長六年七月七日歿、慶長六年七月七日歿
 吉貞 慶長六年七月七日歿、慶長六年七月七日歿

龍雄

安部家の他に菽には俳諧の宗匠系統として、聽松庵、右菽庵、

菖蒲庵の三結社があった。此中聽松庵は最も著聞し、世代十四を算

し、昭和廿四年八月まで連続した。

聽松庵初世、聽松庵箇枕。姓は原、鶴軒とも号す。元永雲谷
 派、画家で、等仲と縁し、馬を描くこと巧みである。眼疾の爲の早く隱退
 し、風流の道に志し、禪學に心を寄せた。俳諧は美濃派四世五竹坊

に師事。安永十年二月二十三日歿。享年六十二。墓石は見當らぬ。位牌は大照院下寺の清正院にある。

二世、致一房、單に致一とも号す。簡牘で同じく雲谷派の画を描き、禪學にも志した。天明八年十一月十四日歿。享年不詳。位牌は清正院にある。

三世、垂聲房、歿年、享年等不明である。享和三年發行の追善句集「鶴のかぐら」に執筆せる序文がある。

四世、夢游房烏強、歿年、享年不明。金谷天満宮境内にある放生會碑文の作者で、それには文政三年十月十三日とある。

五世、雲鯨、大野泰二、直度、嘉永六年五月八日歿。享年不詳。墓は熊谷町光樂寺墓地にある。

六世、蘿月、熊谷五八、芳淑、夙に學芸を好み、文雅の嗜深く、各地を遊歴し、頼山陽、高野長英等と交を結ぶ。文久二年八月二十一日歿。享年不詳。墓は北古萩梅藏院にある。

七世、四睡庵壺公、永安永莊、俳諧、他和歌書画を能くし、

茶事と嗜む。萩と出て東京在位の後、京都に移り住み、芭蕉堂六世と継ぐ。明治十年五月二十三日歿。享年六十八。墓は京都東大谷新墓地にある。

八世、玄々庵幽草、片山久右衛門、農家の出にて、百々各地を行脚、多くの旅日記を残す。明治十五年四月廿六日歿。享年不詳。墓は奥玉江櫻嚴寺にある。

九世、得齋、英壽人、阿武州郡小川村出身の醫師にて永く萩に住し、幽草の跡を享けて九世となりしも、飯村したるにより一應其任を辞したるも巴城俳友の切なる勧めにより、明治十八年九月再び文台継承の決意となす。明治二十三年十一月八日歿。享年七十。

十世、六木園宜哉、有吉幸造、維新前着の諸役と經。明治十三年選ばれて川島、土原、長と号す。俳諧は壺公に學ぶ。明治二十七年十二月五日歿。享年六十三。北古萩本行寺に葬る。

十一世 扶桑園龍華。岡村智秀。後に伊藤と改姓す。御許町
永林寺住職である。大正四年十二月三日歿。享年六十三。上
原弘法寺墓地に葬る。

十二世 百花園台雨。澤村卯之助。晩年瓦町に於て旅館を
営む。大正七年二月四日樽屋町嫡男久兵衛宅にて歿す。享年
七十六。

十三世 洗耳洞如水。瀧口吉良。貴衆兩院議員に選ばれるな
ど地方の名望家である。大正六年九月文台継承。昭和十年八
月十八日歿。享年七十八。

十四世 自他樂庵只月。原田益雄。明治二十九年台北在
官中より俳句に志し、花下聽秋に師事し、大正五年三月花下之
邸へ、或は京都妙心寺禪堂に参す。昭和十一年聽松庵継承。
昭和二十四年八月五日歿。享年八十一。明木村西榮寺に葬

聽松庵に次ぐ其系統が明らかりなつて居たものに古萩園があり、左の通

り世代十一と算へた。里

古萩園初世。古萩園寒川。美濃五竹坊の下に螢雪の功を積
み、安永二年老師自筆の文台と譲與せらる。歿年享年共不詳な
るも、文化十一年には七十八歳であった。

二世 胡枝庵葺今師坊。美濃派六世大野是竹坊の膝下に
學ぶ。歿年享年共に不詳

三世 常々園雨聽。如慈園又は方五齋とも号する藩士である。六
十四才の時四世へ文台と譲る。歿年享年不詳。

四世 六花園素全。山根平七忠成。雪汀園とも号す。天保十
二年五月十七日日文台開。藩士。万延元年九月二十七日兵
庫の陣營に歿す。享年不詳。墓は熊谷町西生寺にある。

準五世 曉花園春和。山根秀亮。大審院判事。從四位文
素全の歿後暫時文台を預かる。

五世 六不園宜哉。有吉幸造。

六世 八霞井清和。増山九右衛門。可清と号す。明治廿八年五月廿六日文台閣。明治廿八年十二月六日歿。享年七十五。墓は吉田町三千坊にある。

七世 如水、中村文右衛門祇敷、梅處と号し島根縣令たり。明治三十三年十月四日歿。享年七十八。墓は北古萩海潮寺にあり。

八世 扶桑園龍華、岡村智秀

九世 百花園曇雨、澤村仰之助

十世 洗耳洞如水、瀧口吉良

十一世 一路、伊佐辰四郎、作仙と号す。昭和七年三月廿七日之杣、昭和十一年一月十五日歿。享年八十三。

聽松庵及古萩園、他に萩には尚葛蒲庵と云ふ俳諧の社あり。次に記す通り、九世代と算へて居る。然しこの社が葛蒲庵と云ふこと、及初世より五世までのことば今日まで明らかになり成書に載つて居ない。余は

幸ひに數年來諸書を涉獵した結果、此不明な處を探知することが出來た。一應この世代を略記した後、この資料に就いて述ぶことにする。

葛蒲庵初世、竹奥舎其奇。五十三才の時江戸に行き、白壽坊の教を受けて居る。歿年及享年は共に明かでないが文化十一年には八十四翁として誌されたものがあるから、余程高齢であつたことが知られる。

二世、娛中坊桃戎、姓は安戸。萩藩世祿の士、天保十二年九月歿。享年八十。

三世 觀耕亭尹哉。歿年享年等不詳

四世 三友亭古溪。歿年享年等不詳

五世 雪汀園素全、山根忠成

六世 石鏡亭玉川。作間藤右衛門。藩士にして江戸の等流園倭吹に師事した。歿年享年ともに不詳。

七世 四季園視曉。板垣詰曼。藩士にして等流園に師事し視

曉の号は師の名に付たもの。明治十六年一月三十日歿、享年七十五、北古萩海潮寺に葬る。

八世 六木園宜哉 有吉幸造 明治十五年文台を継承した
九世 扶桑園龍章 岡村智秀

一、北古萩妙元寺の藏の俳書に「秋の筐」と云ふのがある。之は長陽萩の觀耕亭が輯した葛蒲庵娛中坊追悼の俳諧集である。同書に「桃戎は葛蒲庵娛中坊、姓は突戸、^最藩世祿の士とあり、又同書序文中に「近頃は白壽坊老師、洒落をしたまふ云々」竹與老師の閑窓に夜となく書となく奈良茶三石の功とさ道ノ流を継ぎて此國に此人ありと世に稱すまへら風名幾んど海内に鳴り云々」とあり。又同序文署名に「嘉永五^壬子秋九月下茂觀耕亭尹哉」とあり。
二、六木園宜哉の古萩園文台開の詞、内に「古萩園の文台は(中略)四世文花園師久しく受持行れしが公命に依り播州兵庫の厚菴に官務たりし折から素庵師官舎に物故ありしより三友亭のめしは同派の事、百代社中の駈引會式の雅莖をも依頼し過さぬやうに六花園師り

長男曉花園主春和雅兄へ三友亭傳來の竹與舎葛蒲庵の文台とし合併して讓與すべしとの遺言しありしに春和ぬしまた官途の際をきよし予に預かり申すべきよし屢々内諭年あれどもは短不過當の任を承らばたが堅く辭し待りしにいたる春和可清の兩雅美濃に赴き示談の末道の為なればとて説諭の懇命頻りなれば竟に止を得ざるに猶濃陽宗家より讓子の命い、とくすべしなく會頭の大任を蒙りしかば最早謝絶の言葉なく先は芽出た小けふの主となりて風延を開く云々(下畧)とある。

三、宜哉より扶桑園龍章へ文台讓與の控書に次のものがあつた。「我が八江萩の郷に旧藩士作間氏石鏡亭玉川宗匠より四季園視曉宗匠之預かりとなり居たり白壽坊裏書の文台其他傳來の物とを後また六木園の預りとなりしをこたふ扶桑園龍花御坊に讓り傳へて年久しく絶へたるを起し繼續し給へるに此の札の開延を祝ひ壽を待りて改めて耀く色や松と月 六木園 宜哉」

四、素全が以哉坊進善句集「台の月」授書を筆寫したる台。扱
文署名に次の通りあり。「葛蒲月葛蒲の主しるす」
資料を並べた丈では不徹底であり、以下少く余がこの社系統を
新らしく提唱した理由を説明する。初世其音より二代桃成に傳承し
たことは資料一に「道の流氷を継ぎ」とあるによつて明らかであり、三世より三世
尹哉に傳承した文書は見當らないが、資料一の追悼句集を尹哉が出
したことより見て、尹哉は二世正後後の葛蒲庵社中代表者たるは明か
であり、當然三世を継いだと断じて誤りないと思ふ。三世より四世右深に
傳承した記録も見當らないのであるが、初世其音が尚存命した文化十
一年より五世素全の歿時天保十二年までは僅か廿八年に過ぎず
、この間に二世より五世まで四世代もあることを考ふれば、三世と四世との
間に尚別の世代が介入したと考へられぬ。四世より五世素全に傳承
したことは資料二に「三友亭傳來云々」とあるに疑ふ余地がない。五世よ
り六世玉川への傳承の文書も未発見ではあるが資料二により素全の嫡
男春和より、後に八世となつた宜哉へ、文が傳承し來つた古萩園の文

台と共に繼承せしやと交渉（但し當時は「受託せし」したことがわかぬ。而して素全の
歿時萬延元年より宜哉が七代視曉より傳承した明治十五年まで
廿三年あるが、この間素全と玉川との間に別の世代があつたとは考へられ
ない。結局玉川は素全より繼承したと推定したのであり。文世より九代能
畢に至るまでの傳承は資料三によつて明かである。

この社の名縁は葛蒲庵なることは宜哉の實子田總百山画伯が「唐
樋の板垣一幼少の時よく使ひに行つたが、板垣の社の名はあやの庵と云つ
たと先年余に語られたこと、資料四の如く素全は葛蒲の主と称して居た
こと、資料二に「三友亭傳來の竹奥葛蒲庵の文台」とある等を考へ
合せば明らかである。尚古萩園の讀み方に就て附言するが、一路古萩園
十一世の甥伊佐権三郎氏にこしう園と云つて居た。是が正しいと思ふ。

第一會場

俳諧資料展々 示品解説

(一九五二・一〇・三〇—三〇・一一・三〇)

養源派 (短冊)

(白壽坊) 酒はよりにこころ當あり庵の森。

山本勉弥氏所藏

(風塵坊) 松風やそれつらぬいて雄子の声。

(百茶坊) どこへゆくと子には水けりころもがへ。

(琴和坊) 菜の花や味せうとつめのこさ水て。

(耕月庵) 朝がほからちなきその日 / かな。

(一瓢) うえしまふ田に美しき月夜かな。

聽松庵 (短冊)

(筒枕) めでたからんそ水にま菊の時

(致一坊) ふと閑し山時鳥弥生山

(垂聲坊) 宿更の松にすがるや秋の暮



左 右 右 左 左 左 左 左

(鳥) 強) 葉柳や江に流ふ家に鷓鴣の声 左
 (雲) 鯨) 此のまやの右四月うつりやかきつばた 左
 (蘿) 月) 此のまきし長か小松の若母どり 左
 (壺) 公) 神樂笛杉間ノ葦や、ふけし 左
 (幽) 草) 人聲の朝からすちや秋の山 左
 (得) 齋) くらふたつならべし軒や冬はたん 左
 (眞) 哉) 照りそゆる月も匂ふぬ花の上 田総右山氏所蔵
 (龍) 華) 月かけのほしにくみなの明にけり 山不勉彌氏所蔵
 (台) 面) 花は散るものと思へど名残りかな 左
 (如) 水) 雲は氷て海と山との初日かな 左
 (只) 月) 松一本雪に不老のすがたかな 左

古 萩 庵

(素全筆蹟) 鶯の声美しや登の軒 左
 (眞) 城) はれやかな御代壽ぎて今日ノ菊 左
 (清) 和) 龍の若葉うるけし山かつら 左

(梅) 處) とかくする中に時雨ち、會式かな 山不勉彌氏所蔵
 (龍) 華) 眠をとらて時雨聞く日となりにけり 左
 (台) 雨) むと粒の雨と午向の菊の日 左
 (如) 水) 鶴駕の碑しのかぶ指月や夏木を 左
 (一) 路) 月に満花にやとりて宿の客 左

葛 蒲 庵

(娛中坊) さ、波も今朝かぬ池やけつ水 妙 元 寺 所蔵
 (古) 漢) 往かへり左りや右に夏の富士 明水圖書館所蔵
 (素全筆蹟) 時雨ち、や人舌く春氷く里の家 山不勉彌氏所蔵
 (視) 鏡) 小倉井や袖にくみゆく花吹雪 左
 (眞) 哉) 花まるにつけてもふき日のめぐみ 田総右山氏所蔵
 (龍) 華) 人花に似て人花に似ざりける 山不勉彌氏所蔵

安 部 家

(武) 貞) 音に鳴て別水やしたふ友千鳥
 (和) 貞) 「和歌」
 (行) 貞) 冬の日暮る、もまたてうき世哉
 (惟) 貞) 「和歌」
 (正) 臣) 「和歌」
 (露) 朝) さ、汲る人よる、山声の冬初日

山所勉弥氏所蔵
 全 全 全 全 全
 右 右 右 右 右

其他近代萩の俳人の出品

○大賀 後助 (中村三郎氏所蔵) ○ 蘇大 (山所勉弥氏所蔵 以下所蔵者不明)
 ○品川 弥一 ○小田 東一 ○有 福 某 ○伊水 尚勝 (藤澤武平氏所蔵)
 ○宗像 春暁園 ○長 信 興 ○田 総 百 山 ○牧 野 某 (A. 氏所蔵)
 ○前田 大月庵 ○入 江 自然亭 (田総百山氏所蔵) ○門 田 達
 島仙 ○紫 風 ○田 村 知 輔 ○作 間 吉 之 助 (藤沢武平氏所蔵)
 ○竹 重 彌 肚 ○馬 島 春 海 ○平 部 無 衣 ○村 田 峯 次 郎

來萩せる俳人の作品

○時々庵 明治廿二年末萩 ○鈴 不 陽 堂 明治廿四年末萩
 ○木 國 庵 明治廿五年末萩 ○笠 原 某 明治廿七年 ○慶 山 以 軒
 ○可 仙 大正五年 ○月 仙 大正末年 ○春 日 庵 明治二十一年
 ○野 村 仁 石 工 門 ○福 崎 茂 明治廿一年 ○花 木 聽 秋 ○
 巖 谷 小 波 ○碧 梧 桐

聽松庵六世蘿月遺愛之品

(芭蕉日西護) あるところにてみたてて、不和の中に一よき明が
 下弦の月のあはれなるあつたき星よりうらいたして
 明けゆくや二十七夜と三かの月

巖谷鼓養氏所蔵

(其) 角) 花薄染水引を戸にほして
 (嵐) 雪) 庵の夜もみどかくなりぬ少しつゝ
 (言) 水) 木がらしのはてはありけり海の音
 (山陽之詩) 花着意中花友達意外友云々

全 全 全 全
 右 右 右 右

(田能村竹田) さくらさく今日のみと日はいつまでもとて
やらぐ春暮るこも

一幅

- 芭蕉像 竹内八郎氏所藏
- 仙石屋元坊 (手紙) 藤沢武平氏所藏
- 五竹坊 (書) 明木図書館所藏
- 伊哉坊 (手紙) 藤沢武平氏所藏
- 白壽坊 (書) 田村慶一氏所藏
- 遊 (句) 津村和彦氏所藏
- 耕風庵 (文之句) 明木図書館所藏
- 文柳 (書) 明木図書館所藏
- 子琴 (句) 山平勉弥氏所藏
- 筒枕 (句) 明木図書館所藏
- 右 (画) 山平勉弥氏所藏

左 右

- 壺公護學僊画 明木図書館所藏
- 壺公護克齋画 田総石山氏所藏
- 只月 (句) 白井六郎氏所藏
- 七利清徳 (連歌) 山平勉弥氏所藏

(展示図書)

- 俳諧十論 支考著 奈古屋家所藏 (以下所蔵之卷下)
- 秋の筈 磯成道博句集 妙元寺
- 名所方角鈔 宗祇著 奈古屋家
- 連歌両方 以或以忠著 奈古屋家
- 為學集 (連歌心得書) 宗祇
- 奈古屋 春興 長陽五明門下 白水連 妙元寺
- 玉璫神納兩方連歌 山平家
- 珠玉庵千句 宗祇 奈古屋家
- 連集良軒
- 江原御城御會 山平家
- 珠玉庵千句 宗祇 奈古屋家
- 連集良軒
- 連歌参考 奈古屋家
- 目明記 支考著 俳諧覺書 宜哉 妙元寺
- 俳諧人名錄
- 三編 推草編 奈古屋家
- 芭蕉翁肖像 藤沢庵什物 明木図書館
- 俳諧

句集 榎馨著 山下家 ○俳諧秘書 中村三郎 ○^{大正}俳諧阿部武貞等、俳
句和歌 山下家 ○萩の茂集 清和文芸閣句集 河野家 ○俳諧問答 河
野家 ○葉さくら 雨聽追悼句集 河野家 ○台雨文台披露句集 山下家
雪の晴 熊谷豊路追善句集 山下家 ○幽草遠吟 山下家 ○黄鳥集
河野家 ○^{俳諧}連歌歌仙行 喜壽一路翁之訊文 山○^{俳諧}萩図書館 ○旅日記 幽草
明不図書館

追 加 (短冊)

美濃派

(山下友左坊) 遊ぶ世のいよく 廣きさくら哉 中村三郎氏所蔵

古萩庵

(里 川) 草の露とけて 識の別水霜 明不図書館所蔵

(雨 聰) けつ日かげ 福壽二見の松と梅 全 右

第二會場

萩現代俳人の部

(神野真津女) ありそみの古りい 台場戸風あふる

(石田不雪) 頂きに池ありといふ 亭粧ふ

(中村撫牛) 通過する貨物列車や 火焔の歌

(福田無聲女) 紅梅のいと長き 香りかな

(全 右) 春水のめぐりて 庭のみろさかな

(福田夢汀) 一つの世と旅はかなしく 月ひとつ

(神野真津女) 林檎むく指環春の 灯にきよら

(吉屋信子) 旧藩の地団を飾りて 梅雨の漏

(福田無聲女) あると出て 萬歳声を高めけり

(河田雁兒) まごのうをけなご ぬ老匠杖枯

(福田無聲女) 掃けばちる花に 帯を投けてする

(福田 蓼汀) 日に酔うてひとまどろみし菊日和
 (久保 雲仙) 南簿連々次々時雨傘たぐ
 (福田 蓼汀) 夜先虫寐わたる家は安らげく
 (門田 雁兒) 背の子のキとてきて居りぬ無花果
 (吉屋 信子) 蚊帳釣つて萩の城下はみず早寐
 (中井 撫牛) 曼珠沙華一本立ってあるふしぎ
 (福田 蓼汀) 福壽早家族のこくかたまり
 (久保 雲仙) いとこ煮は萩の名物つめたけ水
 (西村 螺村) 島陰のこきは暎日の西田寺
 (福田 蓼汀) 篋底に秘めし玉虫のや知かり
 萩 來遊俳人の部
 (野島 無量子) 飛穴のこが涼しや腰かけん
 (佐野、石) 名木の松あり庭に月を待つ
 (柳 聖甫) 魚掛樹に傘さかりまや春の池

(京極 杞陽) 夏かか人親切に空青し
 (横見 利一) 蓮生ふ鏡眼の中海光り
 (河原 碧梧桐) や、冥海近き橋を渡る朝
 (京極 杞陽) 木犀の香に士族位々今一佳や

菊 舎の部

葉柳の蔭やおとひ羽をしかくし 福
 紅葉散るやく水をお潜る水車
 くけてたもつよはひや菊の下流水
 むかふかたに金神はなしく花の雲
 かはらしや幾世重おし毛衣は
 よしつきし萬代を先つくと夜酒
 しら、初や唐人山の松風も
 いく白ししるきはよと心哉外は句 屏風
 す、しこのくらへてなし富士おろし 扇面

表田 今治氏所藏
 左 右
 中原二郎氏所藏
 坂高麗左門氏所藏
 中原二郎氏所藏
 坂高麗左門氏所藏
 上田恒一氏所藏
 山岸勉孫氏所藏

関の産をたいてはなく水鶴と我り短冊
折にさそな真如の月の牙ごころ 額
し、ナリし七の緒ことの音と絶へぬ宿の十川の存不冬く揚
勢ハしニ見にたかしく松の月

北川利雄氏所蔵
三輪敏雄氏所蔵
中原二郎氏所蔵
中村三郎氏所蔵

特別出品

(小林一茶) けふからは日本の「ぞらくにとへ」
(白田重浪) 雨きり鈴玉し声きた、廿あへす

山平忠之氏所蔵
竹内八郎氏所蔵

昭和廿六年十一月五日

山口縣之教団書館記

追加

(村田峯二郎) 夕立とけ水て蛙の座禪かな

末田今治氏所蔵

13J
27cm



TRC102093

1
4

萩市立図書館



111352761